

(まえがき) 孔大寺山の植物

宗像には先人が守り受け継いできた貴重な自然が身近に数多く残されています。地域の人々が日々ハイキングを楽しんでいる四塚をはじめとする里山もその一つです。

池野コミュニティ運営協議会では「まちづくり計画」に基づく活動の一環として、地元の人々から里山として親しまれてきた孔大寺山にはどんな自然が残っているか探してみようと「池野の自然探索グループ」を立ち上げ、植物観察を主体とした山歩きの活動を始めました。

探索の場所およびコースは、昔の里山の雰囲気が残っていると思われる孔大寺神社参道と一般登山道です。現地観察調査の間隔・回数は不定期ですが、年間を通して全季節の観察ができるよう、年に何度も現地を訪れる観察を数年間続けています。同じ観察コースについて季節を変え、年を変えて度々訪れると、さまざまな生き物の多様な生き様にも出会えます。植物社会だけでなく植物と昆虫、植物と菌類等異なった種族間の関わりや知らず知らずのうちに植物を始めとする自然環境にいろいろな影響を及ぼしている人間活動の影響など、里地里山ならではの興味ある自然の有様や、自然からの示唆、謎にも多く出会いました。特にこれ等の謎は興味深いもので、散策中に出会った謎のうち特に大きな興味を感じた謎には「孔大寺山の七不思議」と名付け、コース順の番号を付けて記事の中に盛り込みました。これらの身近に見られる謎は手付かずの原生林や原生花園でなく里地里山を探索したからこそ巡り合える謎だと思います。池野の自然、郷里の自然を多くの方々に楽しんでいただくとともに、地域の方々にとって地元の魅力再発見の手掛かりとなれば幸いです。なお今回掲載したのは『孔大寺山の植物』と題して池野地区コミュニティ運営協議会から発行している散策地図付き写真冊子を増補改訂したものです。

令和 2021 年 2 月 9 日

池野地区コミュニティ運営協議会

まちづくり計画「池野探索」活動委員会

自然探索グループ 代表 安部敏男

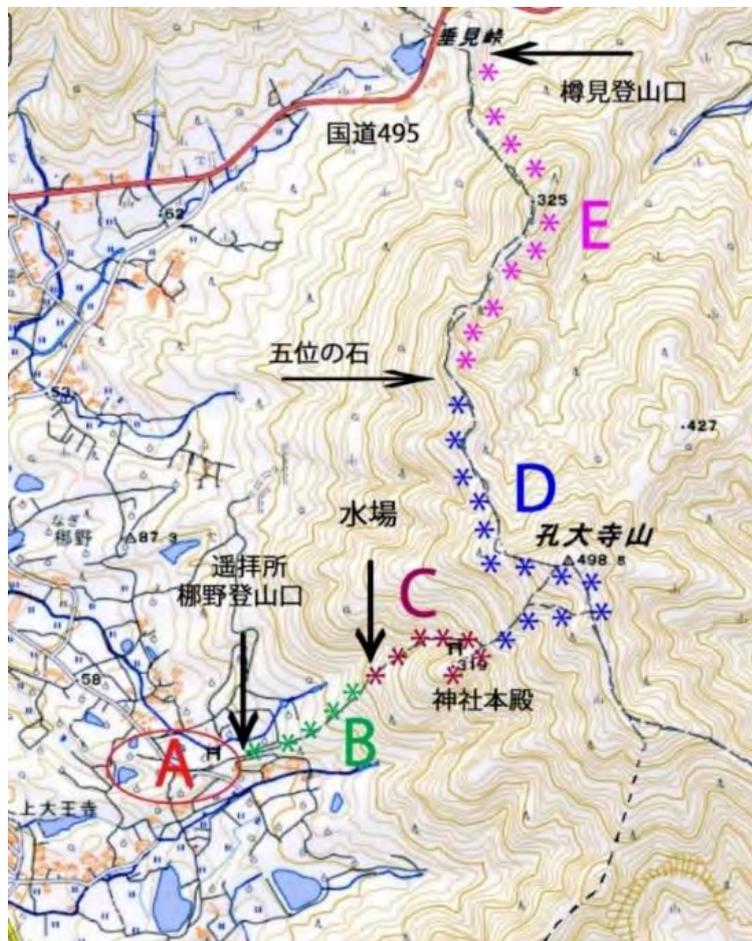
【 掲載資料の検索方法 】

この資料に掲載した植物は下記の方法で探すことができます。

1. 観察コースに沿って探す
2. 季節で探す
3. 植物種和名の五十音で探す

1. 〔観察コースに沿って探す〕

出発点 A-ゾーンから終点 E-ゾーン出口までの距離は約 5km。登山口 B ゾーンの標高は約 100m、最高地点の孔大寺山山頂は標高 499m、E ゾーン出口の標高は約 100m。全行程の標高差は 400m。5 km の全行程を 5つの区間（ゾーン）に分け、植物およびその植物と関連を持つ昆虫その他を観察。各ゾーンの環境特徴（標高、日照環境、植生）は下記地図資料及び各ゾーン毎の植物紹介欄で簡略に示した。



観察コース地図

A ゾーン 赤

：人里草地（神社遙拝所周辺）
（標高 約 100 m）

B ゾーン 緑（参道兼登山道）

：榎野登山口 ～ 水場
（標高約 100 m）（標高 250 m）

C ゾーン 茶（参道兼登山道）

：水場 ～ 神社本殿
（250m）（標高 319 m）

D ゾーン 紺（登山道）

：神社本殿 ～ 孔大寺山頂
（319m）（標高 499 m）
～ 五位の石
（標高 380 m）

E ゾーン 桃色（登山道）

：五位の石 ～ 垂見峠登山口
（380m）（標高約 100 m）

A ゾーンの植物

神社遥拝所参道周辺の人里草地。人間社会との関わりが特に大きいゾーン。



1. オミナエシ



2. ナンバンギセル



3. サイヨウシャジン



4. アキノキリンソウ



5. ウツボグサ



6. ナギ



7. ヒツパ知

B ゾーンの植物

杉檜植林地内の登山道兼神社参道で道幅は約3m。孔大寺山全体は植林されて数十年を経過して安定した人工林となり、人手の介入は少ないと思われる。一方、観察をおこなったBゾーンエリアは孔大寺神社の参道周辺で、年一回の定期的な藪刈り払い手入れをはじめとして人手の関与がある。道沿いには里山の雰囲気を感じられ観察される植物の種類も多く、植林地内に比べ多様性あり。



8. シヤガ



9. コショウノキ



10. イヌビワ



11. ヤマブキ



12. アオキ



13. ヤマザクラ



14. コクラン



15. タイリンアオイ



16. ムサシアブミ



17. ナルコユリ



18. ツクシタニギキョウ



19. ツルニンジン

C ゾーンの植物

谷筋を登る登山道兼神社参道、直射日光が十分に入る明るい西斜面で道幅約 3 m。

神社境内には大木が多く薄暗い自然林。C ゾーン全体も神社参道と神社境内で人手の関与が多く、里山に近い環境。神社境内および周辺林には過去古い時代より神社関係者が植えたと思われる大きな銀杏の木が 20 本近く見られる。また、希少種等貴重な植物も見られる。



20. タカネハシヨウヅル



21. キジョラン



22. ニワトコ



23. イラクサ



24. フタリシズカ



25. マルミナヤゴボウ



26. マムシグサ



27. イチヤクソウ



28. アリドオシ



29. イチョウ



30. カゴノキ

D ゾーンの植物

神社本殿～山頂～五位の石。本殿から上部は杉の植林地内、しばらく登ると檜林となり尾根筋に至る。尾根筋は幅約20メートルの自然林。大木、老木が多く薄暗い。山頂の三角点を中心に半径約20mの円周上に複数の岩窟群あり、使途不明であるが過去の遺物と思われる。山頂から北の山道は急な下り坂の森林が続き五位の石に至る。尾根筋の自然林は尾根の左右斜面に植林をおこなった際尾根筋保護のため従来からの自然林を一部残したものである。

五位の石は尾根筋に鎮座する大石。平安時代に安徳天皇と平家一門の西国遷幸にまつわる伝説あり。



31. ヤブニッケイ



32. イヌシデ



33. アカガシ



34. スダジイ



35. コナラ



36. ギンリョウソウ



37. ツルシキミ



38. ウリハダカエデ

E ゾーンの植物

五位の石 ～ 垂見峠登山口。Eゾーンの標高は380m～100mで標高の高い所ではスダジイ、コナラの大木が多く、標高が下がってくると沿海性のタブ、マテバシイ、ヤブツバキが多くなる。ヤブツバキ以外はいずれも高木、大木で林床にはあまり日射が入らない。Eゾーンの末端部はマテバシイ主体の幅広い林となる。数十年前までは山麓集落の里山としてマテバシイ（方言 マテジイ）は炭焼に利用されていた。炭焼きに使われなくなった現在、伐採後の株元から出た萌芽枝の一本一本が生長してマテバシイの純林になった。垂見峠登山口に近い山麓部には昔の炭窯跡も見られる。



39. タブノキ



40. ヤブツバキ



41. カラスザンショウ



42. マテバシイ林

2. 〔季節で探す〕

四季に応じた散策コースの選択にご利用ください。

〔 春 〕



13. ヤマザクラ



22. ニワトコ



8. シャガ



11. ヤマブキ



21. 羽化するアゲハマダラ



7. ヒトツバタゴ



25. マルミノヤマゴボウ (花)



28. アリドオシ



9. コシヨウノキ (花)



35. コナラ (雄花)



34. スダジイ (雄花)



36. キシヨクク

〔 夏 〕



9. コシヨウノキ (熟果)



17. ナルコユリ



18. ツクシタニキキョウ



15. タイリンアオイ



25. マルミヤマゴボウ (果序)



14. コ克蘭



5. ウツボグサ



2. ナンギセル



24. フタリシズカ



26. マムシグサ



16. ムサシアブミ



27. イチヤクソウ



23. イラクサ



41. カラスザンショウ (花)

〔 秋 〕



1. オミナエシ



3. サイヨウシャジン



4. アキノキリンソウ



10. イヌビワ (果実)



19. ツルニンジン



20. 効ネハツショウヅル



29. イチョウ



35. コナラ (紅葉)



42. マテバシイ (ドングリ)



32. イヌシデ (翼果)

〔 冬 〕



12. アオキ (実)



40. ヤブツバキ (花)



37. ツルシキミ (実)

3. [和名の五十音で探す]

| 50音 | 和名 | 検索 No. | 生態形態分類 |
|-----|-----------|--------|---------|
| あ | アオキ | 12 | 常緑低木 |
| | アカガシ | 33 | 常緑高木 |
| | アキノキリンソウ | 4 | 多年草 |
| | アリドオシ | 28 | 常緑小低木 |
| | イチョウ | 29 | 落葉高木 |
| | イチヤクソウ | 27 | 菌栄養依存植物 |
| | イヌシデ | 32 | 落葉高木 |
| | イヌビワ | 10 | 落葉低木 |
| | イラクサ | 23 | 多年草 |
| | ウツボグサ | 5 | 多年草 |
| | ウリハダカエデ | 38 | 落葉高木 |
| | オミナエシ | 1 | 多年草 |
| | | | |
| か | カゴノキ | 30 | 常緑高木 |
| | カラスガ ンショウ | 41 | 落葉高木 |
| | キジョラン | 21 | 常緑つる性 |
| | ギンリョウソウ | 36 | 菌栄養依存植物 |

| 50音 | 和名 | 検索 No. | 生態形態分類 |
|-----|------------|--------|--------|
| | コショウノキ | 9 | 常緑低小木 |
| | コ克蘭 | 14 | 常緑多年草 |
| | コナラ | 35 | 落葉高木 |
| | | | |
| さ | サイヨウシャジン | 3 | 多年草 |
| | シャガ | 8 | 常緑多年草 |
| | スタジイ | 34 | 常緑高木 |
| | | | |
| た | タイリンアオイ | 15 | 常緑多年草 |
| | タカネハンショウヅル | 20 | つる性多年草 |
| | タブノキ | 39 | 常緑高木 |
| | ツクシタニギキョウ | 18 | 多年草 |
| | ツルシキミ | 37 | 常緑小低木 |
| | ツルニンジン | 19 | つる性多年草 |
| | | | |
| な | ナギ | 6 | 常緑高木 |
| | ナルコユリ | 17 | 多年草 |
| | ナンバンギセル | 2 | 寄生植物 |

| 50音 | 和名 | 検索 No. | 生態形態分類 |
|-----|-----------|--------|--------|
| | ニワトコ | 22 | 落葉低木 |
| | | | |
| は | ヒトツバタゴ | 7 | 落葉低木 |
| | フタリシズカ | 24 | 多年草 |
| | | | |
| ま | マテバシイ | 42 | 常緑高木 |
| | マムシグサ | 26 | 多年草 |
| | マルミノヤマゴボウ | 25 | 多年草 |
| | ムサシアブミ | 16 | 多年草 |
| | | | |
| や | ヤブツバキ | 40 | 常緑高木 |
| | ヤブニッケイ | 31 | 常緑高木 |
| | ヤマザクラ | 13 | 落葉高木 |
| | ヤマブキ | 11 | 落葉小低木 |
| | | | |

詳細説明

1. オミナエシ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|--------------------|-----------------------------------|---------|------|-----|
| オミナエシ (市内暫定希少種) | レンプクソウ科 (旧分類：オミナエシ科) オミナエシ属 | 多年草 | A | 女郎花 |

日当たりの良い草地に生え、茎は直立し60～100cmで枝を分け先に花の軸を出す。花は黄色で3～4mmの粟粒状、横に平たい塊となって付く。昔は何処にでもあったが、今はほとんど見られなくなったオミナエシの群落が孔大寺山の榎野登山口に近い土手で毎年見られる。花期は8～9月。暫定希少種の群落がどうしてここに安定して存続しているのか。「**第一の不思議**」。この草地は地元の管理者により毎年決まった時期に雑草刈り払い管理がおこなわれている。人の手が入ることによって成立している草原や里山の生態系の生き物は人が手を入れなくなった途端に減少していくと言われている*1 p137。此処に見られる群落は安定的に維持されている草原モデルの一つと思われる。管理者にお聞きすると現在おこなわれている草刈り管理は、別段オミナエシの保護存続を目指した作業ではないとのこと。



観察コース全体図

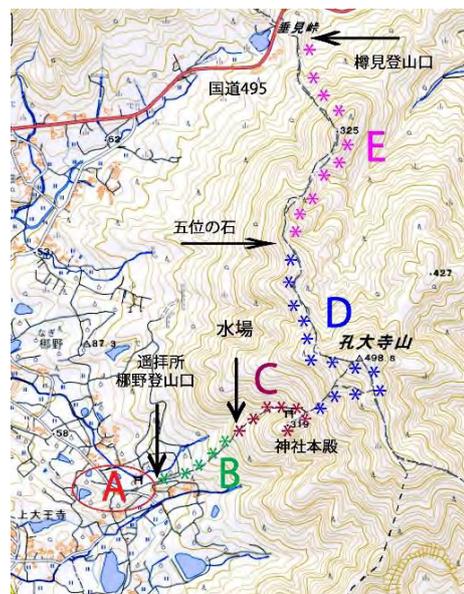
2. ナンバンギセル



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|---------|--------------------|---------|------|-----|
| ナンバンギセル | ハマウツボ科 ナンバンギセル属 | 寄生性一年草 | A | 思い草 |

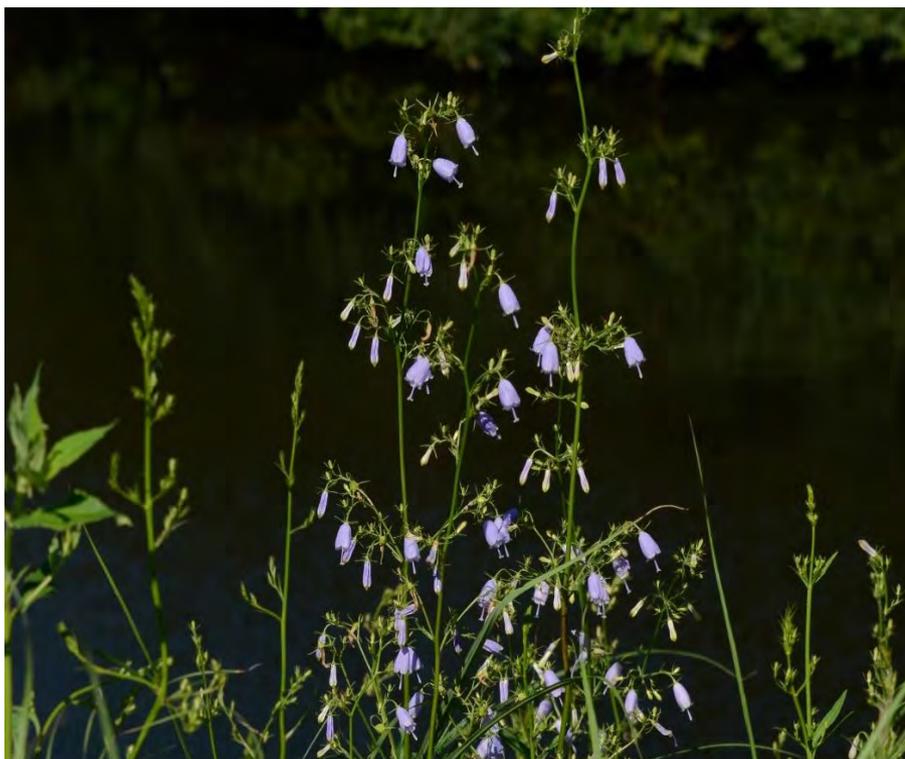
ススキ、サトウキビなど単子葉植物の根に寄生し、土の中から花茎だけを伸ばし、花を咲かせ実を結ぶ。葉は退化して地中の鱗片葉となり葉緑素を持たない。花の茎は高さ 15～30 cm。先端に長さ 1.5～3 cm、紅紫色のパイプ状の花をつける。生育に必要な養分は寄主植物からもらって生きている寄生植物。別名の思い草は万葉集の歌に使われている呼び名で、昔から関心を持たれていた野草のようです。花期は 8～9 月。

道の辺の尾花が下の思ひ草
今さらさらに何をか思はむ
(『万葉集』巻十 2270)



観察コース全体図

3. サイヨウシャジン



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 漢字・別名 |
|----------|--------------------|---------|------|--------------|
| サイヨウシャジン | キキョウ科 ツリガネニンジン属 | 多年草 | A | 細葉紗参 長崎紗参 |

山野、高原で多く見られる花だが、宗像では山間の溜池の土手等で見かける。茎は直立し、高さ50~100cm。茎の上部の節から四方に枝を広げて多数の花をつけ、全体は円錐状になる。花は青紫の鐘形、白色の個体もあり。花期は8~10月。ツリガネニンジン（紗参）の近縁種で花もよく似ているが、ツリガネニンジンは九州では稀とされる。宗像で見られるものはめしべの先端が長く伸び出ている形態からサイヨウシャジンである。



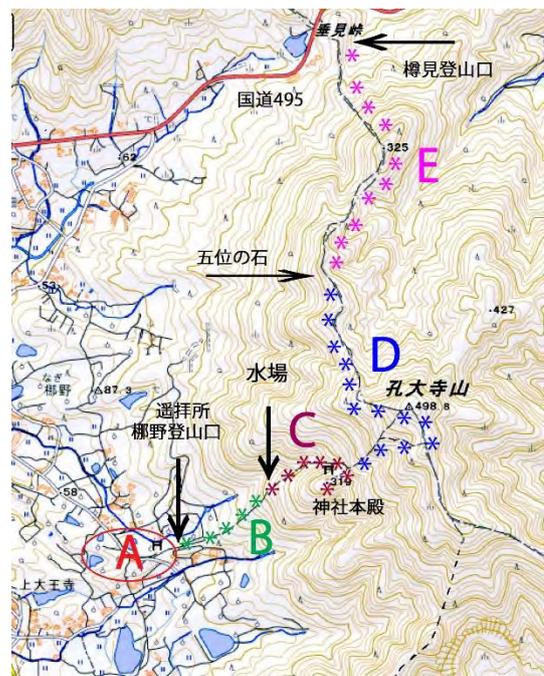
観察コース全体図

4. アキノキリンソウ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 漢字・別名 |
|----------|------------------|---------|------|--------------------|
| アキノキリンソウ | キク科 アキノキリンソウ属 | 多年草 | A | 秋麒麟草、嫁菜 秋野菊、泡立草 |

日当たりの良い山地草原に生える。高さ30～80cm、上部で枝分かれして多数の頭花を総状につける。頭花は径1.2～1.4cm。鮮やかな黄色、花期は8月～11月。花の姿、形から秋麒麟草、嫁菜、泡立草、秋野菊など多くの呼び名を持つ人気の野草で、普通に見られる。



観察コース全体図

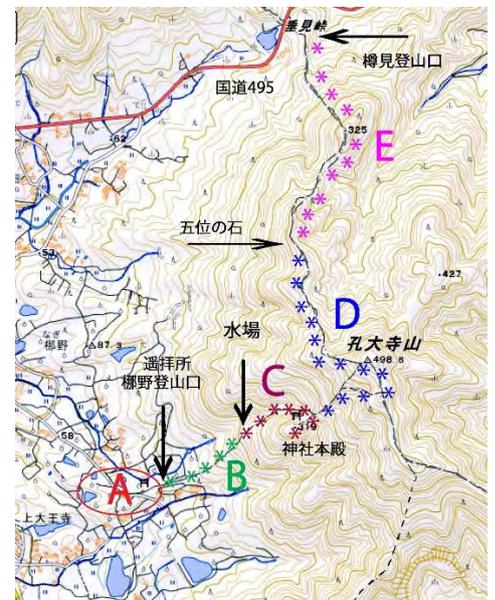
5. ウツボグサ



参道の群落

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|-------|---------------|---------|------|-----------|
| ウツボグサ | シソ科 ウツボグサ属 | 多年草 | A | カコソウ（夏枯草） |

孔大寺神社遥拝所参道の草地に群落を作っている。草丈は 10～30cm。和名は筒形の花房を、矢を入れる昔の武具鞆（うつぼ）に見立ててウツボグサと命名された。夏枯草とは、夏に花房が黒く枯れる時期の花穂を漢方薬として使われる時の名に由来する。花は紫色で、長さ 1.5～2 cm。花期は 5 月下旬から 6 月中旬。この花も以前は池野の山畑のあぜ道などでよく見かけたが近年見ることが少なくなった。先に紹介したオミナエシとこのウツボグサの群落は昔懐かしい草原を思い出させる風景だ。この群落のある神社参道草地も地元の人達による定期的な草刈り管理が永年続けられてきた。先のオミナエシ群落と同様昔ながらの野草群落存続は「第二の不思議」。草刈り管理は神社地元氏子の人達が代々受け継いできた参道の維持管理の一環である。変らぬ手入れ管理を営々と続けることが里地山維持管理の要諦か。



観察コース全体図

6. ナギ



径 15 mm になった果実 10月

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 漢名 |
|----|------------|---------|------|----|
| ナギ | マキ科 ナギ属 | 常緑高木 | A | 竹柏 |

暖地に自生する木で神社に多く見られ、孔大寺神社では遥拝所参道脇に植栽されている。ちなみにこの神社のある集落字名は榎野（ナギノ）。葉の幅が広いので広葉樹のようだがマキやイチョウと同じ針葉樹。葉脈には主脈が無く細い平行脈が基部から葉先まで多数あるのが針葉樹の特徴。当樹木は樹径の生長と共に小さくなった樹皮を不定形の断片にして剥ぎ落とし生長する。



観察コース全体図

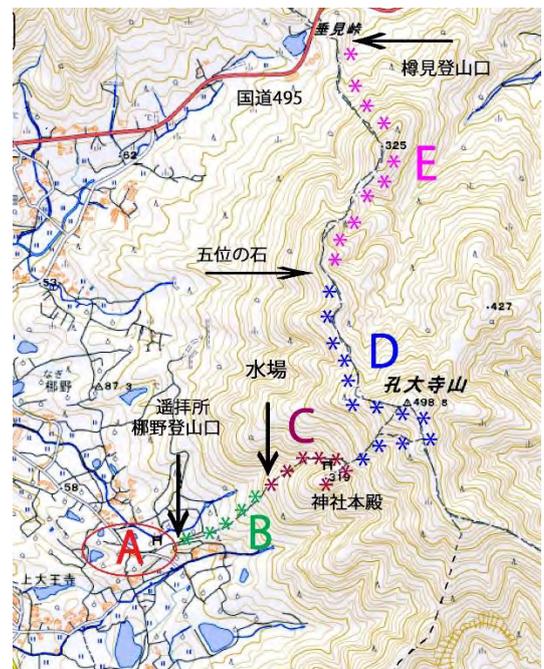
7. ヒトツバタゴ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 方言・別名 |
|--------|------------------|---------|------|----------|
| ヒトツバタゴ | モクセイ科 ヒトツバタゴ属 | 落葉高木 | A | ナンジャモンジャ |

国内での自生地は愛知県、岐阜県、対馬と少なく、珍木とも言われているが近年植栽によりあちこちで見られる。孔大寺神社の遥拝所にも植栽されており、毎年4月末から5月上旬の花期には木全体が白い花で覆われる。花弁は深く四裂して、長さ1.5~2cm 白色。枝先に、長さ7~12cmの円錐状に多数の花をつける。別名ナンジャモンジャは珍しい木だ「なんじゃろう」からきたとの説。

自生地での生育個体数は非常に少なく、植栽木は孤立しているので種絶滅寸前の危惧。



観察コース全体図

8. シャガ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|-----|--------------|---------|------|
| シャガ | アヤメ科 アヤメ属 | 常緑多年草 | B |

やや湿った林床、林縁に群生する。地下に這う茎を伸ばし、葉をつける。葉は長さ 30～60 cm、幅 2～3 cm、茎は 30～70 cm 上部で枝を分け、多数の花をつける。花は白色で、径約 5 cm 青紫色と橙黄色の斑点がある。古く中国から渡来し、野生化したものと言われている。

花期は 4～5 月。B ゾーンの参道脇で多く見られる。



観察コース全体図

9. コショウノキ

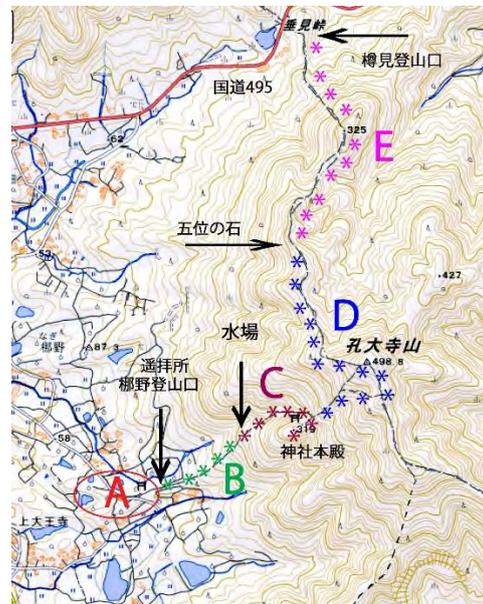


花

実

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|--------|--------------------|---------|------|
| コショウノキ | ジンチョウゲ科 ジンチョウゲ属 | 常緑小低木 | B |

日陰の疎林に生えるジンチョウゲに近縁の小低木。早春にジンチョウゲに似た芳香を漂わせる白い花をつける。雌雄異株、果実は初夏に赤く熟し、噛むと非常に辛いのでコショウの名がついた。樹皮を和紙製造に使われるミツマタにも近い仲間、この木の樹皮もしなやかで強靱。花期は2～3月。宗像の山ではよく見かける小低木だが、地域によってはやや稀少種とされ、レッドリストに指定している県もある。



観察コース全体図

10. イヌビワ



観察コース全体図

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 方言・別名 |
|------|--------------|---------|-------|-------------------|
| イヌビワ | クワ科 イチジク属 | 落葉低木 | B C E | いたび、ちちのみ、 いすずき |

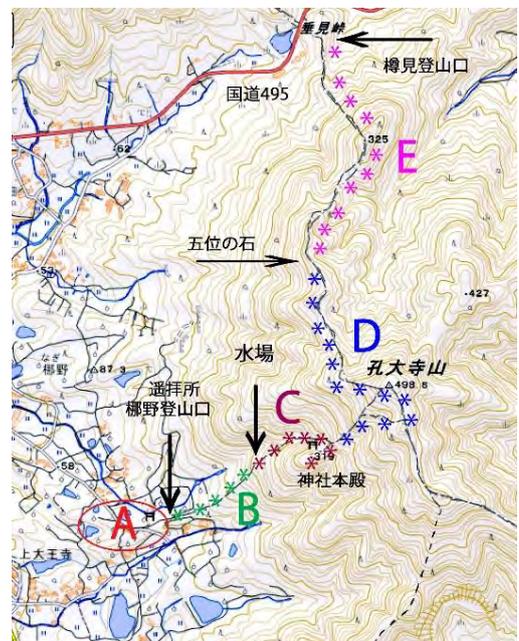
実の形が枇杷に似るためイヌビワの和名が付けられているが、イチジクの仲間。暖かい地方の低山地、里山などに生える野生のイチジク、宗像では「いすずき、いそずき」等の方言で呼ばれ、初秋には黒紫色に熟した実を子供たちが食べていた。イチジク属の植物は花囊と呼ばれる囊の中で花を咲かせ外から花は見えない。花が見えないと受粉が面倒で、特別な共生関係を持った 2mm ほどの蜂イヌビワコバチと共生関係を持ち受粉している。雌雄異株で雌株の実（囊果）はイヌビワ自身の種子生産用に、雄株の花（花囊）は花粉生産と、受粉を手伝うイヌビワコバチ幼虫の保育場（虫瘤）に提供している *2 P 99、*3、*4。イヌビワコバチの雌蜂は花の匂いに導かれて雌花の場合は花囊先端の穴から受粉を、雄花の場合は花囊内に多数の卵を産み付ける。ふ化したコバチ幼虫はそのまま花囊に住み込み内部を食べて成長する。冬季にイヌビワは落葉休眠するが囊果（虫瘤）は落とさず幼虫を保護して越冬させる。幼虫は春に囊内で成虫となり交尾を済ませた雌蜂は外に飛び立つ。この時期に合わせてイヌビワは虫瘤内のおしべに多量の花粉を作り、羽化した雌蜂の体に花粉を付けて送り出す。花粉を付けた雌蜂は産卵場所となるイヌビワの成熟した花囊を求めて飛び回る。しかし雌蜂はイヌビワの花囊に潜り込むまで雌花雄花の判別は出来ず、雌花に潜り込んだ蜂は運んできた花粉で雌花への受粉をおこなう。しかし雌花は受粉は歓迎するが産卵されて虫瘤にされると困るので雌花はコバチが産卵出来ない構造となっている。一方、雄株の花囊に潜った雌蜂は花囊内に産卵し、世代を繋ぐことが出来る。この巧妙で綿密な共生で、イヌビワとイヌビワコバチ両種の次世代存続繁栄がスムーズにおこなわれているようである。一体いかなる過程を経て作り上げられた共進化なのか「**第三の不思議**」。イチジク属の植物は世界に 700 種以上あると言われ、一種のイチジクに対して一種の花粉配送者の 1 対 1 の組み合わせが基本となっている。別の情報として一種のイチジクに対して数種のイチジクコバチが花粉配送者として対応している報告例もある *5 p104。自然界が作ったシステムにはやはり安全装置もあるようだ。

11. ヤマブキ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|------|--------------|---------|------|
| ヤマブキ | バラ科 ヤマブキ属 | 落葉小低木 | B C |

適度な湿度と陽射しにめぐまれた林縁や谷川沿いに多く見られる。孔大寺山ではBゾーンの参道脇と神社本殿南側に群落がある。地下茎を伸ばして密生した小藪を作り、色の代名詞にもなっている山吹色の花を一面に咲かせる。庭の植え込み管理もしやすく、きれいな花を楽しめるので庭にもよく植えられる。茎や枝は初め緑色だがやがて褐色となり3~4年で枯れる。古い茎や枝を切除すると新しい枝が出て毎年花を楽しめる。花期は4月。



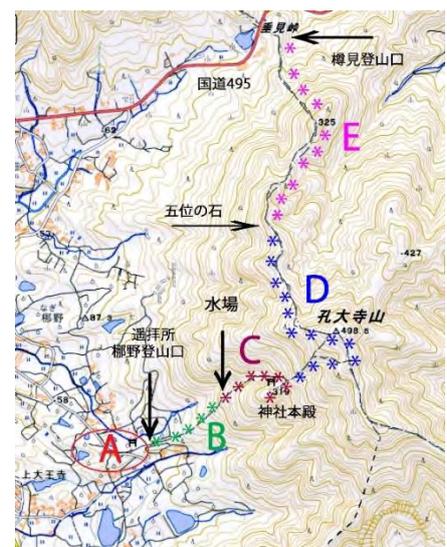
観察コース全体図

12. アオキ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|-----|----------------------------|---------|------------|
| アオキ | アオキ科 (旧分類 ミズキ科) アオキ属 | 常緑低木 | B, C, D, E |

山地林内の下生えとして生える日陰に強い雌雄異株の低木。冬から春先にかけて実が赤く熟し、孔大寺神社の祭礼(3月2日)には赤い実のついたアオキの枝に子供の草鞋をつけたものを地元の氏子が手作りし病い除けのお守りとして販売する伝統行事がある。アオキは民間薬(陀羅尼助)の原料として使われているようだ。孔大寺神社の御祭神は大己貴命(おおなむちのみこと)と少彦名命(すくなひこなのみこと)であるが、この二神は医薬の祖神とも言われ、昔天然痘が流行した時に天然痘が治ると言われ人々が参拝したようだ。アオキの薬草原料説や医薬祖神の病気平癒祈願と、病除けのお守りの伝統行事には関係が有りそうである。



観察コース全体図

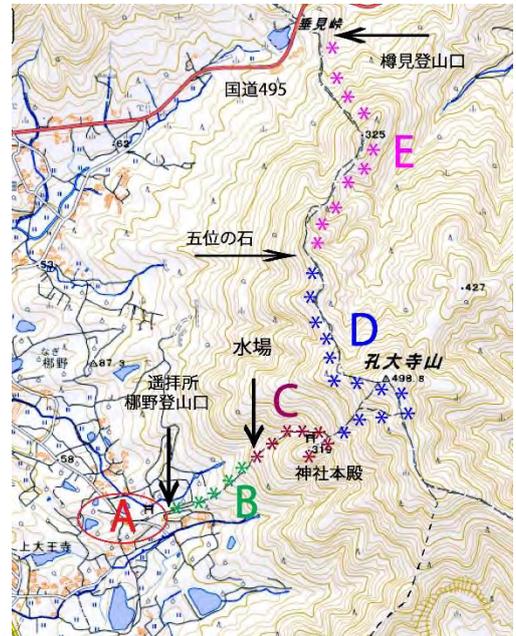
13. ヤマザクラ



雑木林のヤマザクラ

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|-------|-------------|---------|------|
| ヤマザクラ | バラ科 サクラ属 | 落葉高木 | 雑木林 |

宗像市ではヤマザクラの遠景が楽しめる所が多い。花色の濃淡、早咲き、遅咲き等野生種の多様性も楽しめる。写真は孔大寺山の支峰白山の雑木林のヤマザクラ。他に垂見峠に近い脇尾根の自然林にも多い。ヤマザクラは雑木林の中に好んで生えるので早春の里山を華やかに飾って楽しませてくれる。公園や街路樹として普通に見られるソメイヨシノほどの木も似た色、似た姿の花を咲かせるが、近年ソメイヨシノがヤマザクラやエドヒガンなど別な種と交雑しつつあることが分かってきた *6 p 72。この交雑が進めば今後どんな花のサクラが見られるのだろうか。



観察コース全体図

14. コクラン



がつ

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|------|----------------|---------|------|
| コクラン | ラン科 クモキリソウ属 | 常緑多年草 | B |

薄暗く湿った林床に生えるラン科の植物で孔大寺山では比較的よく見かける。花期は6～7月、花弁は細く黒蘭と言っても花色は黒でなく暗紫色。山の中で見ると姿と言ひ、色と言ひ落ち着きを感じる花です。



観察コース全体図

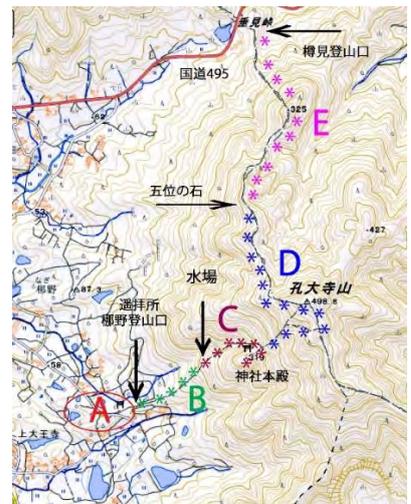
15. タイリンアオイ



開 花

| 和 名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|---------|--------------------|---------|------|
| タイリンアオイ | ウマノスズクサ科 カンアオイ属 | 常緑多年草 | B |

広葉樹林の湿った林床に生える。花期は4～6月、暗紫褐色の萼筒を地面に接して開花。葉は冬も枯れない常緑多年草で多くはカンアオイ独特の雲形紋様がある。徳川家の葵の御紋に使われるフタバアオイも同じくウマノスズクサ科、カンアオイ属だが、こちらは冬に葉が枯れる。



観察コース全体図

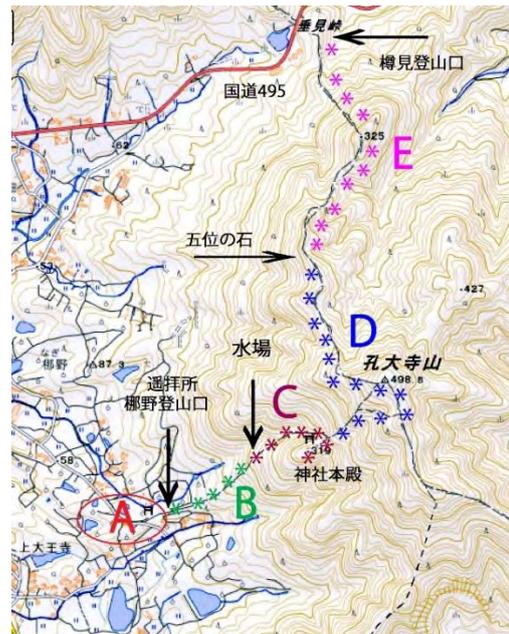
16. ムサシアブミ



開 花

| 和 名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育地 | 漢字名 |
|--------|-------------------|---------|------|-----|
| ムサシアブミ | サトイモ科 テンナンショウ属 | 多年草 | B, E | 武蔵鏡 |

孔大寺山でムサシアブミが生えるのは標高の低いBゾーンとEゾーン両登山口近辺が主体で、特に海に近い垂見峠近辺に多くみられる。ムサシアブミとマムシグサイいずれもサトイモ科の仲間であるが、孔大寺山ではマムシグサが多く、隣の湯川山ではムサシアブミが多く見られる。沿海部に近いか離れているかの違いであろうか。仏炎苞と呼ばれる独特な形の苞が特徴。ムサシアブミの和名もこの苞の形を馬具の鏡に見立てたことに由来。花期は3~4月。



観察コース全体図

17. ナルコユリ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|-------|---------------------------------|---------|------|
| ナルコユリ | クサスギカズラ科 (旧分類 ユリ科) アマドコロ属 | 多年草 | B, C |

花期は5～6月、茎の出始めは上に立って伸び、のち傾いて茎は水平に近くなる。葉は二列に並んでつき、葉の根元から軸を出して、鳴子のように蕾をぶら下げて開花する。花は緑白色。



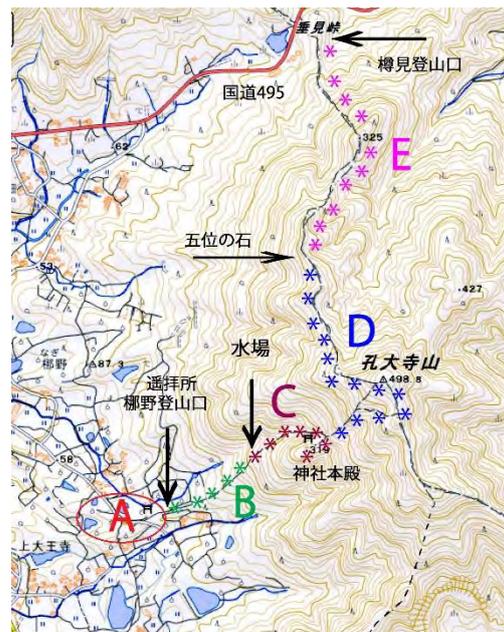
観察コース全体図

18. ツクシタニギキョウ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|-----------|------------------|---------|------|
| ツクシタニギキョウ | キキョウ科 タニギキョウ属 | 多年草 | B |

当ゾーンでは降雨時以外の通常時は枯れ沢となっている谷筋に見られる。花期は4～5月。花は白く、花冠は5深裂し、端正な形の小さな花を群れ咲かせる。葉先はまるく、粗い鋸歯がある。



観察コース全体図

19. ツルニンジン



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|--------|------------------|---------|------|------|
| ツルニンジン | キキョウ科 ツルニンジン属 | つる性多年草 | B | ジイソブ |

林縁、疎林に生える。紡錘形の膨らんだ根を持つのでツルニンジンの和名となる。花は鐘形で長さ 2.5～3.5cm、内側は紫褐色。花期は8～10月。茎や葉を切ると白い乳液が出る。乳液は切り傷に薬効有りと言われる。



観察コース全体図

20. タカネハンショウヅル



赤花系

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|-------------------------|-------------------|---------|------|
| タカネハンショウヅル (市内暫定稀少種) | キンポウゲ科 センニンソウ属 | 多年草 つる性 | C |

花の形が半鐘（釣鐘）に似ることから命名されたが、半鐘よりも風鈴を思わせる爽やかな美しさの花を咲かせる。花弁はなく萼片が花弁状となっている。花は高さ2cm前後の鐘型で、外面は白、内側はピンクが通常の花色。稀に純白の花色のものもあり、とされているが孔大寺山では赤色系、白色系どちらの株も同所で見られる。花期は9～10月。11～12月に長い羽毛を付け種子を飛散する。シロバナハンショウヅルは花期（4～6月）が違い別種。



観察コース全体図

21. キジョラン



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|-------|-----------------------------------|---------|---------|
| キジョラン | キョウチクトウ科 (旧分類 ガガイモ科) キジョラン属 | 常緑つる性植物 | B, C, D |

湿った林床に生えるつる性植物。アケビほどの大きさの実をつけ、初冬に成熟して長い白毛をまとった種子を飛ばす。そのありさまを白髪振り乱した鬼女に見立ててキジョランと命名された。キジョランは渡りをする蝶として知られるアサギマダラの幼虫の食草。孔大寺山では10月～11月に標高300m前後の中腹でキジョランに産卵。12月～1月にふ化した幼虫は冬の間もキジョランの葉を食べ、4～5ヶ月かけてゆっくりと成長、4月末に蛹となり5月に羽化（蛹が脱皮して蝶になる）して蝶となる（第1化）。当地では6月上旬に次の産卵、7月下旬に羽化（第2化）。同時期に3回目の産卵、9月下旬に羽化して第3化の蝶が飛び立つ。夏期の幼虫期間は約2ヶ月。孔大寺山では年間を通して同じ標高の地域で3回の世代交代がおこなわれる。アサギマダラは極端な暑さ寒さが苦手通常夏は北へ、冬は南へと毎年数百kmから千km以上の春秋季節移動をおこなうとされている。しかし一部の個体は秋の南下移動期に本土の温暖地で冬も枯れない食草キジョランに産卵して次代の幼虫を残していくものもある*7 P424。当市ふれあいの森で冬季に見られるアサギマダラの幼虫がこれに相当する。しかし暑い夏のふれあいの森には幼虫はいない。孔大寺山で見られるアサギマダラ幼虫は強い耐寒性と山上の標高による夏季の冷涼化を利用して周年棲息出来る地を見つけ、定着性を獲得したパイオニアグループなのか「**第四の不思議**」。

22 ニワトコ



早春に咲く花

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 方言・別名 |
|------|---------------------------------|---------|------|-------|
| ニワトコ | レンプクソウ科 (旧分類スイカツラ科) ニワトコ属 | 落葉低木 | C | 接骨木 |

登山道の林縁で多く見られ、早春に芽吹き花を咲かせて春の訪れを告げる低木。枝、葉を輪切りにして乾燥し、煎じたものは利尿、むくみなどの民間薬として利用される。花期は3～5月、果実は6～8月に赤く熟し、存在をアピールする。



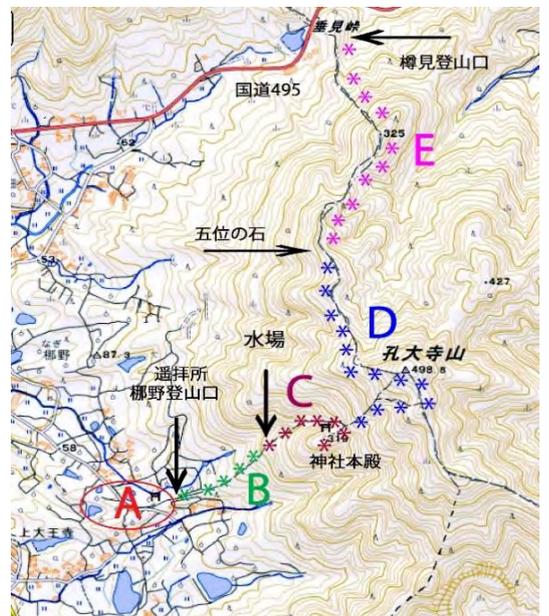
観察コース全体図

23. イラクサ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育地 | 漢名 |
|------|----------------|---------|-----|----|
| イラクサ | イラクサ科 イラクサ属 | 多年草 | C | 蕁麻 |

春先に明るい谷沿いの草むらに繁茂する。うっかり素手のまま草むらに手を突っ込むと、チクチク、ズキズキひどい目にあう。イラクサの漢名は蕁麻(じんま)と書く。蕁麻疹のジンマ。蕁麻疹の原因は食べ物などに含まれるアセチルコリンやヒスタミン等と言われており、これと同じ物質がイラクサのトゲにも含まれていて、蕁麻疹の症状とイラクサに刺された時の症状がそっくりなので、蕁麻の漢名とした。アレルギー体質の人は気を付けた方がよいのかもしれない * 8 p30。



観察コース全体図

24. フタリシズカ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育地 |
|---------------------|------------------|---------|-----|
| フタリシズカ (市内暫定希少種) | センリョウ科 センリョウ属 | 多年草 | C |

林床の湿った半日陰に見られる。花期は5月。一本または二本の軸を伸ばして花をつける。花被はなく雄しべは内側に曲がって雌しべを包むので白い粒がならんだように見える。4月に芽を出し5月上旬には花を咲かせる。



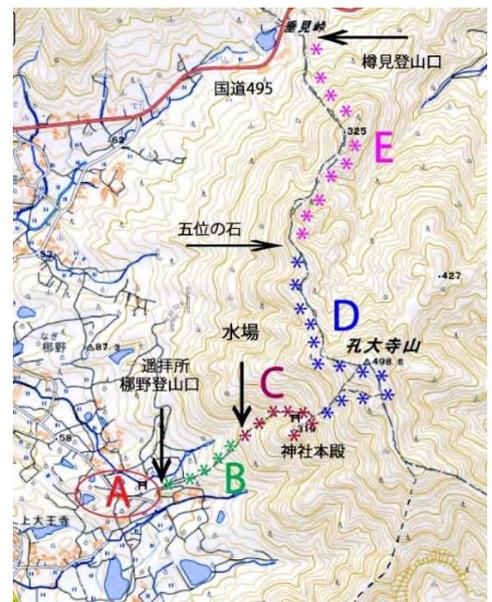
観察コース全体図

25. マルミノヤマゴボウ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育地 |
|------------------------|------------------|---------|-----|
| マルミノヤマゴボウ (市内暫定稀少種) | ヤマゴボウ科 ヤマゴボウ属 | 多年草 | C |

在来自生種のヤマゴボウで稀少種、保護が必要。草丈 50～60 cm。花序は短柄で直立、果序も直立したまま成熟。この形態が特徴で外見上外来種ヨウシュヤマゴボウとの判別は容易。花期は5～6月で、8月中下旬に果実が黒色に熟し、9月に地上部は枯れる。ヨウシュヤマゴボウに比べ種子の産出数少なく、繁殖力、生活力は劣弱に感じられる。両者の競合が気になるが、本種の当地生育地標高約 300m 一帯にヨウシュヤマゴボウの生育は認められず今のところ自生地での競合は見られない。



観察コース全体図

26. マムシグサ



緑色型



観察コース全体図

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育地 |
|-------|-------------------|---------|---------|
| マムシグサ | サトイモ科 テンナンショウ属 | 多年草 | B, C, E |

薄暗い林床に生え、サトイモ科の特徴である葉が変化した仏炎苞を持つ特異な花を咲かせる。仏炎苞には緑色タイプと海老茶タイプがあり、茎にはマムシを連想させる模様がある。雌雄異株の植物であるが株の雌雄は先天的に固定されたものではなく前年に蓄えた養分の多寡で次の年の性が変わる性転換をおこなう。養分が多いと雌（雌花）、中程度だと雄（雄花）、少ないと無性（無花）となる。マムシグサの花粉媒介をおこなう送粉者はハエ目の昆虫キノコバエ* 9 p 50。このハエは花の蜜や花粉が目的で花に来るのではなく、本来は、キノコが発する匂いを辿ってキノコを探し産卵する。ふ化した幼虫はキノコを食べて成長するキノコの害虫として知られている。そのキノコバエがマムシグサの花に来て受粉を助けている。両者の生態関係はまだ明確にわかっていないがキノコバエが送粉者とされるのは、マムシグサとキノコバエの間に見られる行動観察から想定されたようである。マムシグサが発する匂い（と想像されている）に引かれて雄花の花筒に入ったキノコバエは花粉まみれとなり、体に花粉を付けて花筒下部の穴から外に出ていく。しかし雌花に入ったハエは二度と外に出られず中で死ぬとされる。雌花は受精をより確実にするために脱出口の無い構造と、つるつる滑って這い上れない長い花筒構造の手法を用いる。キノコバエはどんな目的でマムシグサの花に入り、何をしているのか、まだ分かっていない。花粉の動物媒では、花粉委託者（植物）と送粉者（動物）はお互いに何らかの利益のある相利関係にあるのが普通である。キノコバエの報酬は何なのか「第五の不思議」。マムシグサの騙し戦略で、キノコバエには利用されて利益なし、との見方もあるようだが両者の関連生態の解明が待たれる。

27. イチヤクソウ



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育地 | 漢字・別名 |
|--------|----------------------------------|------------------------|-----|---------------|
| イチヤクソウ | ツツジ科 旧分類 (イチヤクソウ科) イチヤクソウ属 | 菌従属栄養植物 (常緑多年草) | C | 一葉草・鹿蹄草 鏡草 |

生育環境は光の少ない森林の林床とされ、孔大寺山では神社本殿前の湿った林床に見られる。花期は6月。濃い緑色で厚手の葉を持っているが光合成能力は十分ではないと言われ、生育地周囲の菌類と菌根を形成し、樹木-菌類-イチヤクソウの菌根ネットワークで不足する栄養分を補って生きる菌従属栄養植物である

*10 *11。薬草としても利用され、一葉草とは一つの薬草で色々な病に対する効能が有りとして命名された。



観察コース全体図

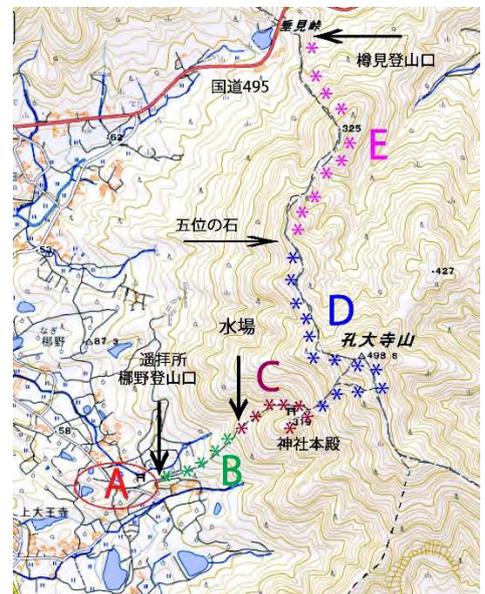
28. アリドオシ



神社境内の群落

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育地 | 漢字名・別名 |
|-------|----------------|---------|---------|--------|
| アリドオシ | アカネ科 アリドオシ属 | 常緑小低木 | B, C, D | 蟻通・一両 |

神社境内の林床に数十株の群落を作って見られる。樹高 20～30 cm。枝には 1～2cm の鋭いトゲが沢山あり、蟻をも刺し通すと言う和名の由来にもなっている。5 月初旬に白い花を咲かせ、冬から春に赤い実を付けるが実の数は少なく別名一両とも言われる。赤い実のなる木では実の数により万両、千両、百両、十両、一両とランク付け。アリドオシは貴重な数少ない実を食害動物から守るため鋭いトゲを付けたとの説がある *12 p28。事の真偽は確認出来ないが、山の中でアリドオシを見つけると多くが数本、数十本からなる密集群落をつくって生えている。実が持ち去られず、親株の近くに落ちて発芽成長した結果だろうか。アリドオシの生き残り戦略として一部は成功しているのかもしれない。



観察コース全体図

29. イチョウ



森林の中で黄葉した神社境内の大銀杏



観察コース全体

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育地 | 別名・漢名 |
|------|----------------|---------|------|-----------|
| イチョウ | イチョウ科 イチョウ属 | 落葉高木 | A, C | 銀杏、公孫樹、鴨脚 |

孔大寺神社の御神木として境内にある福岡県指定天然記念物。胸高幹周り 6.4 m、推定樹齢 300 年の大銀杏。恐竜時代からの生きた化石と言われる古い樹木で、地球上に現れたのは約 2 億年前。化石として残っているイチョウの仲間は 17 種と繁栄。その後何度かの氷河期を経て生き残ったのが現生のイチョウ（1 科 1 属 1 種）とされる *13。原産地は中国、11 世紀頃銀杏に食用としての価値が見いだされて中国で栽培が始まり、日本には室町時代に移入された。強い再生力を持ち、挿し木で簡単に増やせる。種子からの発芽率も良く人為的な繁殖、育成は容易。日本では街路樹として最も多い樹種とされる。しかし現在の自然界では自力繁殖が確認されていない *14。日本にも野生は確認されていない *15。孔大寺神社本殿境内には昔からイチョウが植えられていたようで、本殿境内には大銀杏を含め 4 本の成木と 1 本の若木が見られる。当神社のイチョウに関する古い資料を見ると、筑前国續風土記拾遺（文政 3 年～4 年 1820 年～1821 年）には、ご神木の幹周り参丈壹尺（9.3m）、他に数十株生い茂りとある *16。200 年前の神木が幹周り 9.3m となると、現在の神木（6.4 m）は別物の可能性もあり。昭和 54 年に発行された玄海町誌には、大銀杏の樹群も戦後伐られて神木を残すのみとある *17。境内から外れた千手堂周辺のエを調べて見ると、林の中には直径 1m～1.5m の古く腐朽した切り株が何株もあり、その古株から出た萌芽枝が生長して幹周り 1m～2.8m に生長した木の集団が 7 株、12 本が新たに見つかった。これらの再生樹は玄海町誌で述べられているおよそ 70 年前と推測される戦後伐採されたと言う木から萌芽したものではないか、イチョウの強い再生力の一面である。現在、境内には毎年実を付ける 2 株の雌木が有り、秋に多くの実を樹下に落として翌春多数の発芽苗が見られる。昨年（2020 年）5 月初旬にも多くの種子が樹下で発芽した。しかし、10 cm 程に生長した苗木は 8 月上旬までに大部分が枯死。ごくわずかの苗木が生き残ることもあるが、2 年目の夏を越すものは無く全て消えてしまう。この種子発芽、枯死は例年繰り返されるが、近辺の林には成長しているイチョウの若木は一本も見当たらない、何故なのか「第六の不思議」。イチョウには自然界での自生林が見つからないとすることと同じ現象なのか。

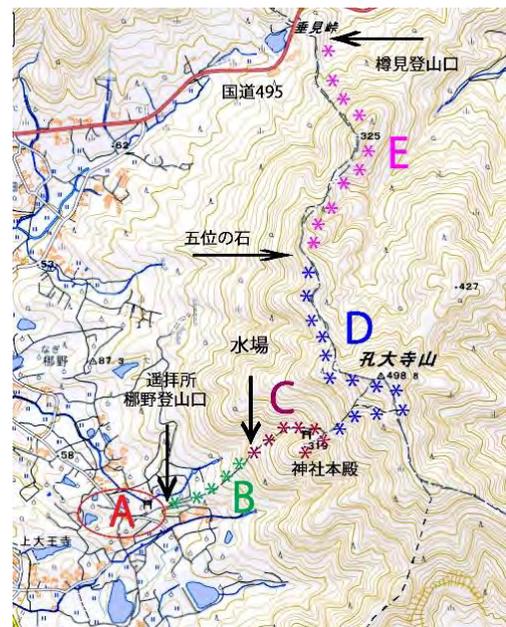
30. カゴノキ



樹皮 葉

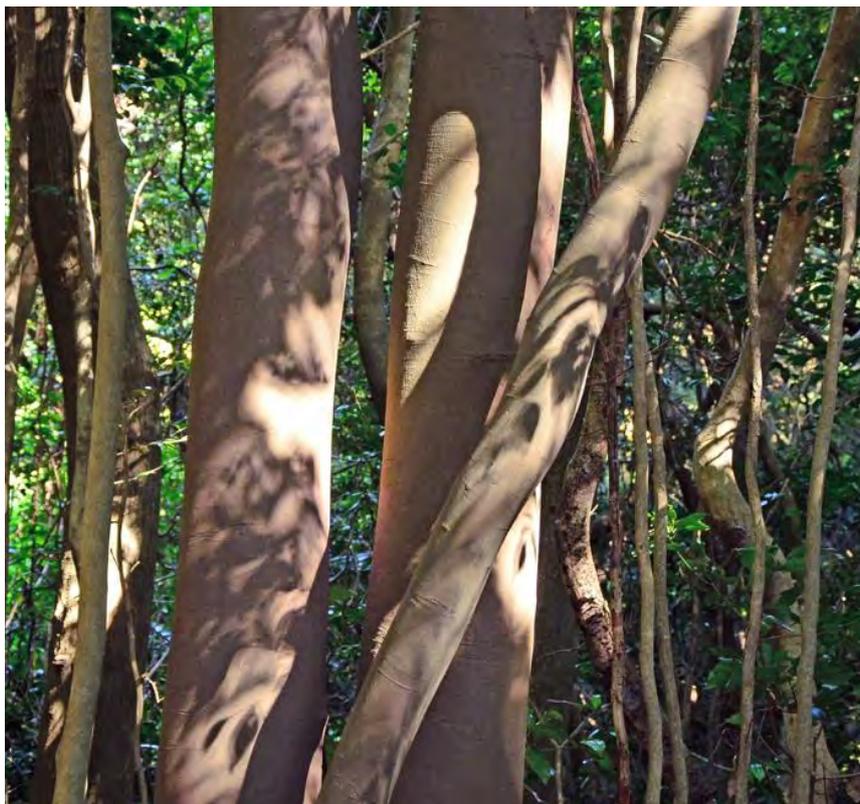
| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|------|----------------|---------|---------|----------------------|
| カゴノキ | クスノキ科 ハマビワ属 | 常緑高木 | C, D, E | 鹿子の木 カノキ コガガシ カノカ |

暖地に生え、高さ 20 m、直径 1.5m の大木にもなる。樹皮は灰黒色、まだらにはがれて白い鹿子模様になるので「鹿子の木」と名付けられた。生長に伴い古く、小さくなった樹皮を脱ぎ捨てて生長するナギと同じタイプ。孔大寺山では少ない樹木だが城山、金山、ふれあいの森では多く見られる。



観察コース全体図

31. ヤブニッケイ

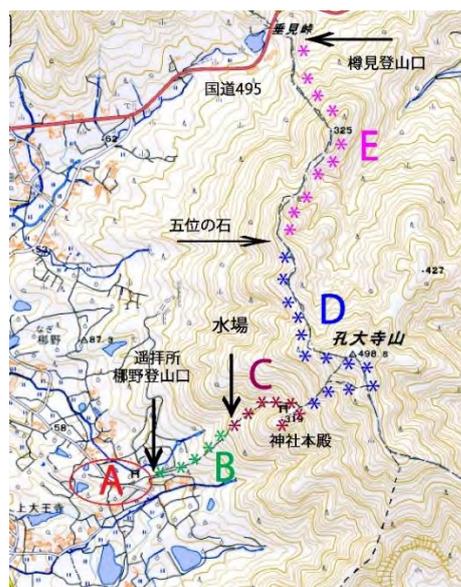


樹皮

葉

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|--------|----------------|---------|------------|----------------------|
| ヤブニッケイ | クスノキ科 クスノキ属 | 常緑高木 | B, C, D, E | マツラニッケイ クスタブ、クロダモ |

高さ 15~20 m の高木になる。樹皮は赤みがかった褐色でなめらか。葉はクスノキ属の特徴 3 葉脈が目立つ。種子から香油をとり、葉や樹皮は薬用に利用される。ニッケイの香りや味はない。



観察コース全体図

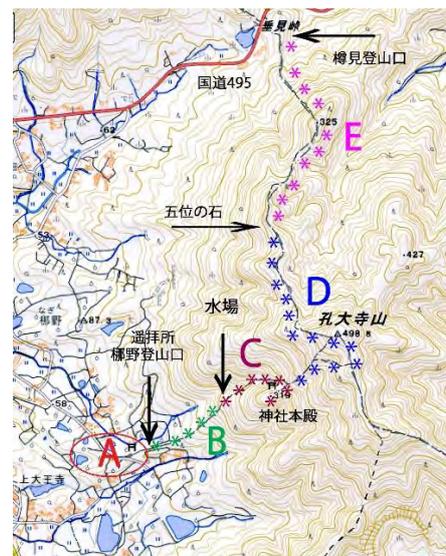
32. イヌシデ



葉 と 樹皮

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|------|----------------|---------|------|------------|
| イヌシデ | カバノキ科 クマシデ属 | 落葉高木 | D | シロシデ ソロ |

樹皮は灰白色で成木になると裂け目模様が目立ち、古木では極端な皸となる。樹径の生長に伴い古く、小さくなった樹皮にひび割れを作りその隙間に新たな樹皮を作りながら生長するタイプ。和名のシデとは漢字で四手とも紙垂とも書く。玉串やしめ縄につけて垂らす紙のこと。翼果の姿をこの四手にみたてた和名。孔大寺山では山頂付近の雑木の残る尾根筋や、支峰の尾根筋でたまに見られる程度で多くはない。他の樹木との見分けになる特徴は、風を利用して種子を散布する翼を付けた種子。また、葉縁の鋸歯が重鋸歯であるのも特徴の一つ。花や種子のない時期にコナラなど葉や樹皮の形態が似た樹木との判別に利用出来る。



観察コース全体図

33. アカガシ



樹皮

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|------|-------------|---------|------|---------------|
| アカガシ | ブナ科 コナラ属 | 常緑高木 | D | オオガシ オオバガシ |

樹高 25 m になる高木。樹皮は灰黒色で皮目は目立たないが大きくなると不規則に割れ目が入り剥がれる。生長に伴い古く小さくなった樹皮を脱ぎ捨てながら生長するナギやカゴノキと同じように生長に伴い小さくなった樹皮を脱ぎ捨てながら生長する。剥がれた後の地肌は赤みが目立つ。材は硬いので建材、農具、拍子木、算盤の珠など様々なものに使われる。和名は材が赤みをおびていることによる。ドングリは食用となる。



観察コース全体図

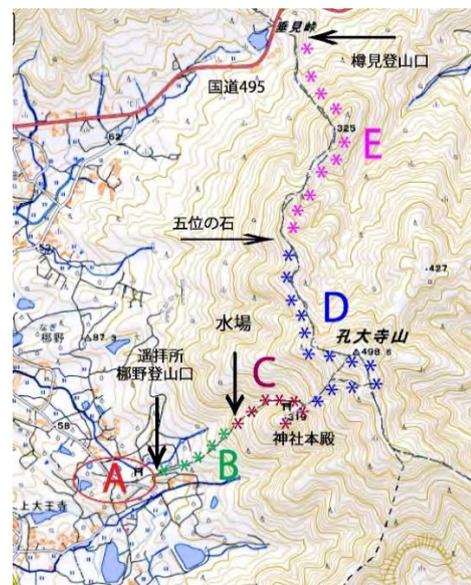
34. スダジイ



樹冠を黄色に飾る雄花

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|------|------------|---------|------|-----------------|
| スダジイ | ブナ科 シイ属 | 常緑高木 | C, D | イタジイ、シイ ナガジイ |

大木、老木となると樹皮は黒褐色で、縦に深く裂け目が出来る。花期は4～5月、樹冠が黄色の雄花でおおわれる。実は翌年の秋に成熟し、タンニンが少ないので生食や炒って食べられる。近似種のツブラジイの樹皮は大木になっても表面が滑らかで裂け目が入らないものが多いようだ。孔大寺山ではスダジイは多いがツブラジイはあまり見かけない。



観察コース全体図

35. コナラ

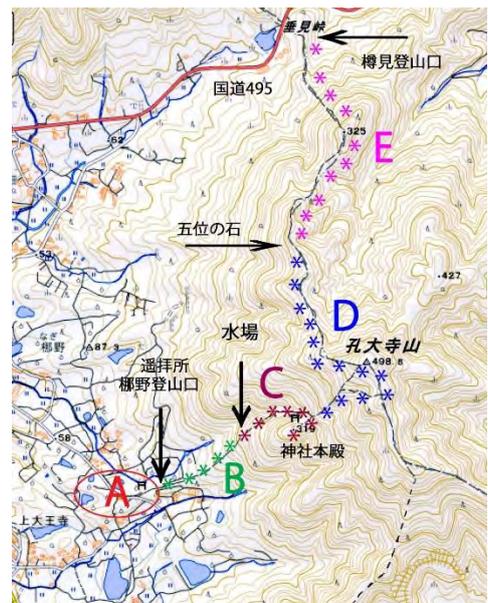


樹皮

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|-----|-------------|---------|------|-----|
| コナラ | ブナ科 コナラ属 | 落葉高木 | D, E | ハウソ |

平地、低山地の里山に多くみられる樹木。

孔大寺山では雑木林の残った D-ゾーン、E-ゾーンの尾根筋で大きな木が少数見られる。樹皮は灰黒色で、縦に不規則な裂け目がある。4月上旬伸びだした新枝の基部から 10cm 前後の雄花序を垂らして黄緑色の花を多数咲かせる。秋の紅葉は赤みがかった黄色。宗像の里山ではハゼノキ、カエデと並んで代表的な紅葉の一つ。



観察コース全体図

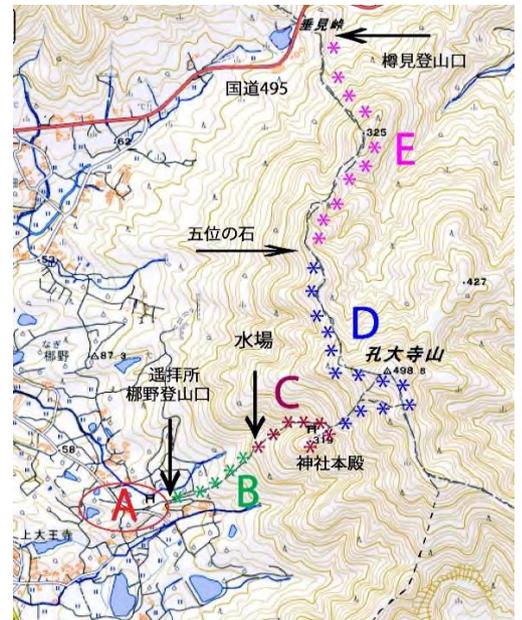
36. ギンリョウソウ



薄暗い林床に白い草体

| 和名 | 系統分類 | 栄養生態 | 生育場所 | 漢名・別名 |
|---------|-----------------------------------|------------------|------|------------|
| ギンリョウソウ | ツツジ科 旧分類 (イチヤクソウ科) ギンリョウソウ属 | 菌従属栄養植物 (多年草) | D, E | 銀竜草 幽霊茸 |

ギンリョウソウは葉緑素を持たないため菌類と共生し、菌類の力をかりて腐植質から栄養をとって生きる腐生植物と言われていた。しかし近年の説では先のイチヤクソウの項で紹介したように樹木がその近隣の菌類と外菌根を作って共生し、その菌類とギンリョウソウが新たな菌根ネットワークを作り、ギンリョウソウは樹木が光合成で作った栄養成分を菌類経由で受け取って生きる菌従属栄養植物とされている*18。樹木は周りの環境(地中)から摂取が難しいミネラルやリンを得るため、自身の根の周りには菌類と外菌根を作って共生し、菌類の働きで可溶化された上記難溶性無機栄養物の利用を可能としている。その代わりに樹木は光合成で生産した糖類などの有機栄養物を菌類に供給する。その菌類にギンリョウソウは寄生して菌根ネットワークを作り、樹木から供給された有機栄養物の一部を菌類経由で受け取っている。しかし、この菌根ネットワーク上でのギンリョウソウの役割、立場は共生なのか寄生なのか不明。



観察コース全体図

37. ツルシキミ



第一群落 ツルシキミタイプ



第二群落 ミヤマシキミタイプが主体



| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|-------|-----------------|---------|------|----------|
| ツルシキミ | ミカン科 ミヤマシキミ属 | 常緑小低木 | D | ミヤマツルシキミ |

生育場所は D ゾーン、孔大寺山頂部の尾根筋に二カ所の群落あり。第一の群落は孔大寺山頂から北側樽見峠に向かって約 300m 下った尾根道周辺。第二の群落は同じ山頂尾根道を南側に 500m 下った白山・地蔵峠分岐点周辺にあり。孔大寺山のツルシキミに関しては 1988 年西日本新聞社出版『野の花ごよみ 宗像の植物』渡辺幸子著の記事あり *19。ツルシキミとは同属ミヤマシキミの変種とされるもので、葉と実の色は殆ど変わらないとされるがツルシキミは茎を地面近くに這わせた後、茎を上立ち上げて枝を伸ばす特徴があり、ミヤマシキミは茎を這わせることなく枝を叢生するとされる。以前孔大寺山で確認されたのはツルシキミと報告されている。今回第一群落で見られるのも全てツルシキミタイプであった。しかし第二群落で見られる個体は多くがミヤマシキミに近い形態であった。同じ山で標高もさほど変わらない所に形態の異なる変異グループが見られるのは興味深いことである。二つの群落を調べると以下の相違点がみられた。森林環境：第一群落は落葉樹と常緑樹が混在した疎林で北向きの痩せ尾根、風当たりの強そうな明るい尾根筋である。第二群落も同様に尾根筋であるが起伏が少なく平坦な台地にアカガシ、スダジイ等の常緑樹の大木が林立した樹林がひろがり鬱蒼とした森である。林床には落ち葉が厚く堆積し、林床への風の吹き込みはあまり強くなさそうである。ミヤマシキミ類の個体樹齢推定：第一群落では個体数は数株と少ないがどの個体も多くの匍匐茎を発達させ、どの個体も齢を経た成木と思われた。第二群落は広い面積を持ち数十個体からなる大きな群落だが、匍匐茎を発達させた株は少なく、上に茎を伸ばすミヤマシキミタイプの個体が多い群落である。

市販図鑑及びネット情報によるとミヤマシキミは温暖な地域の低山に、ツルシキミは高山や高緯度地域など積雪のある冷涼な地域、環境で見られると、住み分け分布が記述されている *20、*21、*22、*23、*24 *25、*26。長期間の積雪時期も無く高山でも高緯度でもない孔大寺山でツルシキミとミヤマシキミがどちらも観察される。この形態変異の要因は何なのか。身近にある里山孔大寺山の「第七の不思議」ではないでしょうか。

38. ウリハダカエデ



樹皮

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 |
|---------|-----------------------------|---------|------|
| ウリハダカエデ | ムクロジ科 (旧分類 カエデ科) カエデ属 | 落葉高木 | D |

若木の樹皮は暗緑色で縞がある。和名は縞模様をマクワウリの果皮に見立てたもの。木肌の色と模様は樹齢により変化、幼木では綺麗な緑一色、次に緑地に黒い縦筋があらわれる。若木になると緑と黒筋の地肌に薄茶色のひし形紋様が縦横規則的に並んで現れる。木が大きくなると茶色の紋様の面積が大きくなり、緑の部分は少なくなる。



観察コース全体図

39. タブノキ



樹皮と葉

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|------|----------------|---------|------|------|
| タブノキ | クスノキ科 タブノキ属 | 常緑高木 | D, E | イヌグス |

樹皮は淡褐色で滑らか、皮目が散在する。
葉は長さ8~15cm,幅3~7cmの長楕円形、皮質で表は濃緑色、光沢あり。暖地性で海岸近くに多い。孔大寺山でもEゾーンに多い。クスノキに似るがクスノキのような芳香はない。



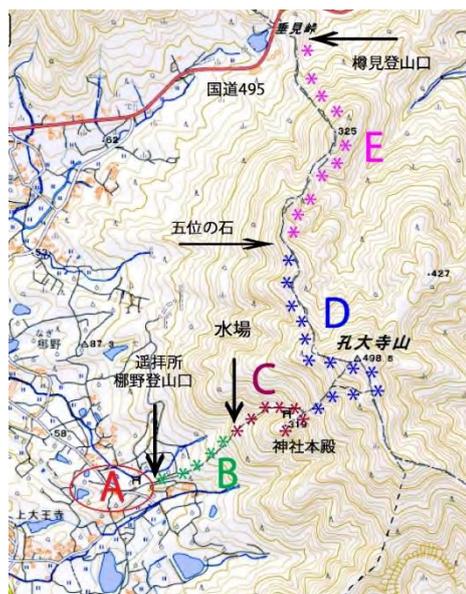
観察コース全体図

40. ヤブツバキ



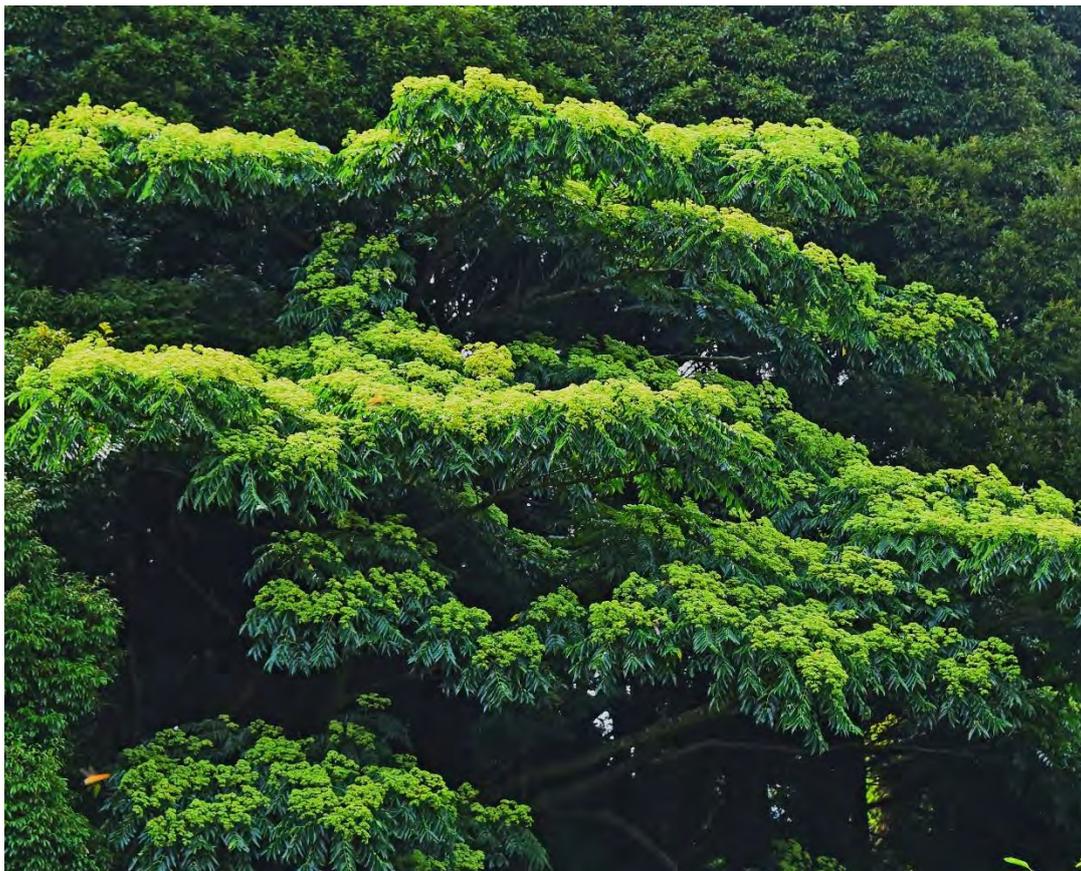
| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|-------|--------------|---------|------|--------------|
| ヤブツバキ | ツバキ科 ツバキ属 | 常緑高木 | D, E | ツバキ ヤマツバキ |

孔大寺山では海岸に近い Eゾーンに多く見られる。潮風に強い性質のため海岸部では防風林として植えられることもある。島嶼や海岸部では昔から種子（宗像方言でカタイシ）から搾油した油を天ぷら油、炊き込みご飯等の食用油として、また整髪油として利用してきた。現在つばき油生産は地島の地場産業の一つになっている。花は冬から春まで長く楽しめる。



観察コース全体図

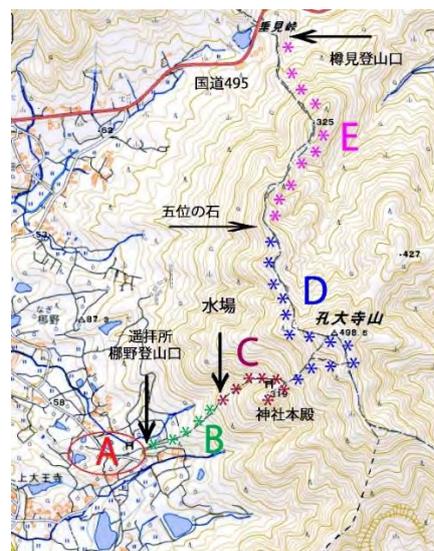
41. カラスザンショウ



夏 樹冠に満開となる花

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 別名 |
|----------|------------------|---------|------|----------|
| カラスザンショウ | ミカン科 イヌサンショウ属 | 落葉高木 | D, E | アコウザンショウ |

若木や枝先の樹皮には鋭いトゲが密生する。成木に成長した木の幹ではトゲは無くなり、丸いぼ状の盛り上がりとなる。若木の幹のトゲは葉や樹皮を食害する野ウサギや鹿に対する防御であろうと想像できるが、高い樹高の成木枝先のトゲは猿に対する防御もあるようだ。葉は長さ 30～80cm の大形奇数羽状複葉で互生する。初夏、黄緑色の小さな花を樹冠いっぱいに咲かせる。



観察コース全体図

42. マテバシイ



E ゾーンを覆うマテバシイの樹林

| 和名 | 系統分類 | 生態・形態分類 | 生育場所 | 漢字・別名 |
|-------|---------------|---------|------|--------------------------|
| マテバシイ | ブナ科 マテバシイ属 | 常緑高木 | E | 馬刀葉椎、サツマジイ マテジイ（宗像方言） |

低山地、沿海地に生える高木。孔大寺山では海岸に近い Eゾーンの下部で見られる。葉は長い楕円形、厚い皮質。堅果は 3cm 前後の長形で翌年の秋に成熟する。タンニンが少なく、あく抜きの手間無しでそのまま炒ったり、茹でて食べられるので、救荒植物として各地に植林された。垂見峠近くにあるマテジイ林は炭焼き用に植えられたもので炭焼きが行われなくなった現在、株元からの萌芽枝が生長し密生した純林状態となっている。林の中には古い炭焼窯跡も所々に残っており数十年前までは地域の生活とも関わりの深かった木であり里山であった。木炭の需要が減り不要になった現在のマテジイ林は殆どマテバシイだけからなる安定した極相林の様相です。



観察コース全体図

参考図書 ・ ネット情報(WI)

- * 1 オミナエシ 池田清彦 『絶滅の生物学』 もうすぐいなくなります P 137
2019 年 新潮社
- * 2 イヌビワ 渡辺一夫 『樹木の個性と生残り戦略』 p 99
2011 年 築地書館
- * 3 イヌビワ (WI) Wikipedia イヌビワ 2020. 8.25
- * 4 イヌビワ (WI) 松江の花図鑑 イヌビワ 2020. 8.25
- * 5 イヌビワ 石井 博 花と昆虫のしたたかで素敵な関係
受粉にまつわる生態学 p 104 2020 年 ベル出版
- * 6 ヤマザクラ 渡辺一夫 『樹木の個性と生残り戦略』 p 72
2011 年 築地書館
- * 7 キジョラン 本田計一 他 チョウの生物学 移動と生活史のかかわり P 424
2005 年 東京大学出版会
- * 8 イラクサ 田中 修 『植物はすごい』 生き残りをかけたしくみと工夫 P 30
2016 年 中公新書
- * 9 マムシグサ 石井 博 花と昆虫のしたたかで素敵な関係
受粉にまつわる生態学 p 104
2020 年 ベル出版
- * 10 イチャクソウ 橋本 靖 (WI) 日本菌学会 第 52 回大会講演要旨
イチャクソウ属は菌従属栄養植物なのか？
暗い森で生きる植物の生存戦略と菌根菌
- * 11 イチャクソウ (WI) 菌根とは アルブトイド菌根
[http://cse.ffpri.affrc.go.jp/akema/public/mycorrhiza/
mycorrhiza.html](http://cse.ffpri.affrc.go.jp/akema/public/mycorrhiza/mycorrhiza.html) 2020/07/29
- * 12 アリドオシ 田中 修 『植物はすごい』 生き残りをかけたしくみと工夫 P 28
2016 年 中公新書

- * 13 イチヨウ (WI) 住友林業 G 森の図書室 2020.07.23
- * 14 イチヨウ ピーター・クレイン 『イチヨウ 奇跡の2億年』
生き残った最古の樹木の物語 2014年 河出書房新社
- * 15 イチヨウ (WI) 奈良女子大 イチヨウ 銀杏
<http://www.town.shimoichi.nara.jp/sightseeing/temple/temple-detail.html>
- * 16 イチヨウ 筑前国續風土記拾遺 文政3~4 (1820年~1821年)
孔大寺神社
- * 17 イチヨウ 玄海町誌 孔大寺の大銀杏 p442 1979年
- * 18 ギンリョウソウ (WI) Wikipedia ギンリョウソウ 2020.07.29
- * 19 ツルシキミ 渡辺幸子 『野の花ごよみ 宗像の植物』 1988年
西日本新聞社発刊
- * 20 ツルシキミ 益村 聖 九州の花図鑑 p412 2000年 海鳥社
- * 21 ツルシキミ 片野田逸朗 九州野山の花 p92 2004年 (株) 南方新社
- * 22 ツルシキミ 大場達之 巽 英明 野の花 3 P148 1982年
(株) 山と溪谷社
- * 23 ツルシキミ 林 弥栄 日本の樹木 p377 1985年
(株) 山と溪谷社
- * 24 ツルシキミ 林 将之 気になる木がわかる p115 2011年
廣齊堂 あかつき株式会社
- * 25 ミヤマシキミ (WI) Wikipedia ミヤマシキミ 2021. 7.6
- * 26 ツルシキミ (WI) Wikipedia ツルシキミ 2021. 7.6
- * 27 全項目 石井 実 植田邦彦 重松敏則
里山の自然をまもる 2003年 築地書館